

第43回児童生徒 読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。
先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

■中学校3年生の部 最優秀賞 世界から大切なものが消えたなら

弟子屈中学校 太田 愛菜さん



もしあなたの命が残り少ないと知ったらどうしますか。

私がこの本に出会ったきっかけは、姉が読んでいたのが気になり私も読んでみたいというのがきっかけです。共感や感動な場面もいくつもありました。

この本は、郵便配達員として働く三十歳の僕がある日突然、脳腫瘍で余命わずかであることを宣告されて、絶望的な気分家で帰ると自分とまったく同じ姿をした男が待っていて、その男は自分を悪魔だと言い、この世界から何かを消す。その代わりに命を得るといふ不思議な物語です。

私がこの本で共感した部分があります。それは、僕の「母さんが言った」「何かを得るためには、何かを失わなくてはね」という言葉です。わかりそうで難しい言葉だと思えます。主人公の僕が「いつか命を得るためには何か失え」という意味でしょうか。私たちの身近かという人を生きていくためには、大事なお金がなくなっていくことでしょうか。この答えはそれぞれあると思いますが私は誰

かが幸せなだけだと不利だからやっぱ不幸なこともあると、うまいくらいに考えられているのだと思いました。

二つ目は、男(悪魔)が言った「死と同じように避けられないものがある。それは生きることだ」という言葉です。一見、死と生は、かけ離れているように思いますが、実は等しいということはこの言葉で表しているのだと思います。これは読んでいる人も自身も死というものはわからないが、きつと後悔が一番にふりかかると思いますが。だから今を精一杯、生きなくちゃいけないんだと私は思います。

そして、私が感動した部分もあります。それは、主人公の僕がこれまで世界から電話と映画と時計を消したが、僕が大切にしていた猫は消せなかった。つまり僕がこの世界から消えることを意味しているという部分は感動しました。だから何かを得るためには、何かを失わなくてはならないんだと思います。

もう一つは、悪魔が言った「あなたは最後の最後で、大切な人や、かけがえないものに気付く。この世界で生きていくことを素晴らしさを知った。今そのことに気付けたあなたは幸せだということだ」という言葉です。最初は僕に無理難題なことをいっていた悪魔でしたが、最後は相手の目線になって温かさがすごい伝わってきて感動しました。

私は、この物語と主人公に対して素晴

らしさを感じました。物語については全体的に物の大切さと人との関わりを大切に描かれています。主人公の素晴らしさは、だんだんと物が命と引き換えになくなっていくなか、最後には猫の命を自分の命より優先できるのは素晴らしいと思いました。

書名「世界から猫が消えたなら」

川村 元気 著

(寸評) 余命を宣告された主人公の若者が、大切なものと引き替えに延命することができるといふ物語を読み、人生に対するさまざまな気づきを太田さんが得たことが伝わってきました。人生において何かを得たいのなら失うものもある、死と同様にこの世に生を受けることも避けることができない、そして、死に直面することで本当に大切なことに気づく。小説というフィクションを通じて思考することで、人生や自己への理解を深めることができました。

そして、父との思い出をふりかえることができたこの本にも、たくさんのおりがとうを伝えたい。

書名「さよなら、ベイビー」

里見 蘭 著

(寸評) お父さんが残してくれた大切なことを想い、自分に素直に向き合った素晴らしい感想文です。西田さんの現在をお父さんがしっかりと支えているんですね。一つ一つの思い出や言葉が西田さんの中で生きていくのだと感じました。「人は死ねば終わりではなく、確かに誰かの中で生きて、繋がっているのだらう」という表現に強く共感しました。読書を通して新しい人生観や考え方に気づいていくことはとても素晴らしいことです。「愛梨」さん。とてもとても素敵な名前ですね。

■高校生の部 最優秀賞 お米のとき方

弟子屈高校2年 西田 愛梨さん



「死。」というものは誰にでも訪れるものだが、私にはとても恐ろしく思える。なぜなら死ねば人は人でなくなってしまうからだ。まわりの人も悲しい気持ちになる。大人になるにつれ、人の死に立ち会う回数が増えるのかと思うと、すごくさびしい気持ちになる。

本では、生まれたばかりの赤んぼと、父を急に亡くした引きこもりの主人公と一緒に成長する姿がえがかれていた。私は、人は死ねばそこで終わりだと思っていたけれど、その人の頑張ったことや伝えようとしてきた強い思いは他の誰かに残っている。作中で、まわりの人や主人公が、亡くなった父が残した思いや優しさを話しの中で見つけたとき、「人の気持ちは消えないで生きていくんだ。」と前向きな気持ちになれた。

私の名前は、父がつけてくれたものだ。最初は名前どおりに読まれない方が多いけれど以前友人が、本当にすてきな名前だと褒めてくれた。嬉しい気持ちと同時にとても誇りがあった。私は、父がつけてくれたこの名前が好きだ。この本を読んだ後、私も父に「ありがとう。」と

感謝を伝えたくなくなった。けれど私の父は、主人公と同じようにもつ居ない。感謝の気持ちを伝えようにも直接伝えることはできない。「親孝行したいときに親はなし。」という言葉があるが、本当にそうか。今まではそんな後悔の念をもっていたが、主人公が世の中に、勇気をもって飛び出す姿を見て感謝は伝えられないけれど、自分が成長することも一つの恩がえしになるのではと考えるようになった。作中では、自分の行動や考え、誰かのためにしたこと少すす、まわりに影響を与える、人と人とのつながりが書かれていた。私は、そこから、自分と人とのつながりで得たものがたくさん生きていくと読んで感じた。だから人は死ねば終わりではなくて、確かに誰かの中で生きて、繋がっているのだらう。

父が亡くなる前、おしえてくれたことは、思いかえせばたくさんあるけれど、特に印象に残っているのは、お米の炊き方だ。料理と一緒に作ることも楽しかった。今では、おかげで料理をすることが私にとって大好きになった。そして父に「将来の予想図をつくりなさい。」と言われたこともよく覚えている。中学生のときはそこまでその言葉について考えたことはなかった。だが、高校生になった今の私には痛いほど身に染みる言葉だ。本を読んだ後、たくさん「してもしらしたこと」の上に今の私がいることに気づいた。父だけではなく、家族や友人、たくさんの人に支えられてきた。きつとこれ

からもそうだ。「ありがとう。」と伝えることの大きさを強く感じた。そして私も誰かのため、例えば子どもができたとしたら、私もたくさんのお子と子どもに残してあげられる人になりたい。

私は今まで新しいことに挑戦することが苦手だった。失敗するのが怖かったからだ。作中に出てくる主人公は引きこもりだ。そんな彼の外に出ることへの恐怖やためらい、他人と話すときのドキドキ、人目を気にするところに、今でも共感できる点がある。けれど、自分の父が亡くなったとき、自分だっていつ死んでしまふか分からないと思っただけで、やってみることが大事なんだと経験をもって学べた。今年の夏にはアルバイトにも行った。アルバイト先に最初にかける電話はすごく緊張したが、アルバイトをしてみて、仕事の大変さ、人のありがたさを感じる事ができた。勇気を出して電話をかけて、挑戦してみても本当に良かった。できるなら直接、父には今の私を見てほしかったし、こんなことができるようになったと伝えたいけれど、きつと見てくれていると信じている。

ありがとうお父さん、残してくれたたくさんのおりがとうが、確かに私の中で生きています。できることもたくさん増えまします。いつも支えてくれる家族、友人、先生



※生徒の学年は、コンクールが行われた平成29年度当時のものです。